



Title	夏目漱石『彼岸過迄』：「平凡」の中に閉ざされる青年たち
Author(s)	ウィリヤエナワット, ピヤヌット
Citation	阪大近代文学研究. 2011, 9, p. 9-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92672
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

夏目漱石『彼岸過迄』

—「平凡」の中に閉ざされる青年たち—

ウィリヤエナワット ピヤヌット

一. はじめに

『彼岸過迄』は明治四十五（一九一二）年一月一日〜四月二十九日に「東京朝日新聞」に発表され⁽¹⁾、その後、大正元年九月十五日に春陽堂より刊行された。『彼岸過迄』は、『風呂の後』、『停留所』、『報告』、『雨の降る日』、『須永の話』、『松本の話』、『結末』という七つの章によって構成されている。『彼岸過迄』は「修善寺の大患を境に大きく転換するとされる漱石の作品群の転換点に位置する小説」⁽²⁾であり、後に続く『行人』（大正元年十二月〜大正二年十一月）、『心』（大正三年四月〜同年八月）と共に、漱石の後期三部作として位置づけられている。

『彼岸過迄』は発表されて以来、しばしば他の漱石作品より低い評価を受け⁽³⁾、研究も他作品より立ち遅れている状態である。その中で、「初めは駄目で後半が面白い」⁽⁴⁾という系列の評価では、作品の後半に重点を置き、作品の主人公

は「須永」であると論じられる。吉田精一氏⁽⁵⁾は「松本の話」「須永の話」に注目し、「個我の孤独な内面の、立体的な、深刻な分析という、「行人」「こゝろ」の主題を貫く」ものであると指摘する（傍線は筆者による。以下同じ）。瀬沼茂樹氏⁽⁶⁾は須永が「独自の近代的自意識に苦しむ孤独な知識人として、第二の三部作において初めて姿を現す人間像である」と述べ、『行人』と『心』の主人公との関連性を述べる。そして、瀬沼論をふまえた藤井省三氏⁽⁷⁾は須永が『それから』の代助に類似していることを述べ、須永像には「自我に苦しむ青年」を創作する漱石の意図があると指摘する。このように須永にのみ焦点が当てられ、作品の後半が注目されたため、『彼岸過迄』は「構成の不出来な作品」、「アンバランスな小説」⁽⁸⁾であると言われてきた。

作品の前半と後半を、同じように重視する研究が出て来るのは、昭和四〇年代に⁽⁹⁾入ってからである。牧野陽子氏⁽¹⁰⁾は敬太郎が『心』の青年「私」と「同じ型の人物」であると

指摘する。さらに、安藤恭子氏⁽¹⁾は敬太郎の役割が「(敬事者)ではなく(目撃者)である」と捉えている。以上の観点以外にも、敬太郎に関して論じる先行論の系列では、『三四郎』の小川三四郎との比較をはじめ、敬太郎の好奇心、成長⁽²⁾、物語の聴き手としての「受話器」という点が重視されている。そして、敬太郎の経験することは「冒険」としばしば結びつけられている。玉井敬之氏⁽³⁾は敬太郎が現状の退屈から逃れるために、「現状から脱出する方法」として「冒険」を探索していると指摘する⁽⁴⁾。作品の流れを追ってみると、敬太郎の「冒険」とは「小川町」での体験であることは言うまでもない。だが、「結末」の章に見られるように、敬太郎は「夫も今になつて記憶の台に載せて眺めると、殆んど冒険とも探検とも名付けやうのない児童であつた」と回顧し、「小川町」での「探偵」は単に「児童」としか考えていない。また、作品の前半では、森本の昔々な「冒険譚」をはじめ、『新亜刺比亜物語』への言及、「文銭占なひ」の婆さんの迷信的な言葉などが描かれ異常な雰囲気をはたせるが、「雨の降る日」になると内容が一変し、「須永の話」、「松本の話」という作品の後半では、須永に焦点が当てられるようになる。このように物語の雰囲気が変わること、敬太郎の「冒険」の話と須永の抱える問題の話という二人の主人公の物語が浮かび上がる。「前者は後者の一種陰画的伏線になつてゐる」⁽⁵⁾とする指摘があるものの、作品前半にお

いて、敬太郎という人物に重点が置かれ、彼の人格が浮き彫りになつてゐることからは、敬太郎の話が単に須永の話への伏線であるとは考え難い。

また、敬太郎と須永の性格描写を見てみたい。敬太郎は、学生時代に「或宗教家」から、「四方から閉ぢ込められ」、「自分丈硝子張の箱の中に入れられて、外の物と直に続いてゐない心持が絶えずして」いたという話を聞いたのを思い出す。そして、自分が「何一つ突き抜いて痛快だといふ感じを得た事のないのは、坊主にならない前の此宗教家の心に何処か似た点がある」と考える。敬太郎は外部の世界と接触し、何もできない現状から脱出することを願っている。これにひきかえ、須永は「世の中と接触する度に内へとぐるを捲き込む性質」で、二人の主人公が外部に対して逆の反応を取るようになる聞き手ではなく、須永と同等に再検討する必要がある。本論では、敬太郎と須永という二人の青年が本作品の主人公であるという立場から、論を進めていきたい。まず、敬太郎の人物造形と、小川町での「探偵の仕事」について考える。また、その後に、須永の人物像についても考察し、本作品において、敬太郎と須永の二人が、どのような位置関係にあるのかを測定してみたい。

二、敬太郎の人物造形

(1) 独歩からの影響

敬太郎は「此夏」「大学を卒業した許の法学士」であるが、仕事が見つからず就職活動のための奔走に嫌気が差す。「遣伝的に平凡を忌む浪漫趣味の青年」である敬太郎は、自分の現状に不満を持ち、「平凡」な生活の退屈を紛らわすため、同じ下宿に住んでいる「非凡の経験に富んだ平凡人」とても評しなければ評しやうのない」（風呂の後・五）森本から「冒險譚」を求めようとする。また、想像力が豊かな敬太郎は常に非日常的なことを見出そうとして、「自分はたゞ人間の研究者否人間の異常なる機関が暗い闇夜に運転する有様を、驚嘆の念を以て眺めてゐたい」とあるように、「驚きたい」という強い願望を抱いている。この「驚嘆の念を以て眺めてゐたい」という表現をめぐって、出原隆俊氏¹⁶は『彼岸過迄』の中に「非凡の経験に富んだ平凡人」という言葉がある。これは、独歩の小説『非凡なる凡人』を想起させよう。あるいは「驚嘆の念を以て眺めてゐたい」という敬太郎という人物の言葉も、独歩の『牛肉と馬鈴薯』に見られる「吃驚した」というのが僕の願なんです」に由来していると考えられる」と指摘する。このように、作者は国木田独歩の作品から言葉のレベルで影響を受けていることが分かる。

また、表現のレベルのみならず、「冒險」を体験する登場人物についても、本作品と独歩の作品との共通点を見出せる。ここで、森本の冒險と独歩の『非凡なる凡人』¹⁷において

描かれる登場人物の冒險に注目したい。敬太郎が森本のように「冒險」を経験したいと言いつつ、森本は次のような反応を示す。

・「それが極悪い。若い内——と云つた所で、貴方と僕はさう年も違つてゐないやうだが、——兎に角若い内は何でも變つた事が為て見たいもんでね。所が其變つた事を仕尽した上で、考へて見ると、何だ馬鹿らしい、こんな事なら為ない方が余程増しだと思ふ丈でさあ。貴方なんざ、是からの身体だ。大人なしくさへして居りや何んな發展でも出来やうつもんだから、肝心な所で山氣だの謀叛氣だのつて低氣圧を起しちや親不孝に當らあね。——時に何うです、此間から何がはうくと思つて、つい忙がしくつて、何がはずにゐたんだが、何か好い口は見付かりましたか」（風呂の後・六）

かつて「冒險譚の主人公であつた」森本の言葉からは彼が自分の過去を反省し、過去の「變化の多い經驗」を「馬鹿らしい」と思い、糊口という日常的なことを重んじていることが読み取れる。また、この言葉には「冒險」に対する森本の考え方と、敬太郎への生き方についての忠告が込められている。敬太郎が体験したいと思う「冒險」の裏側にある厳しさや仄めかされている。そして、「冒險」を体験した「漂浪者」である森本は、結局、安定した生活ができずに、異国に渡らなければならなくなる。

一方の『非凡なる凡人』において、登場人物の冒険はどのように描写されるのか、まず粗筋を確認しておこう。主人公の桂正作は武士の子で、父は士族の商法で失敗し破産した。だが、正作は愛読する『西国立志編』に刺激を受け、独力で運命を切り開こうとする。さらに、父のように山気から行動するのではなく、目的達成のために着実に自分の意志を実行する。正作と父との運命の違いは、「僕」という正作の友人の言葉からも明らかである。

・けれども天の与えた性質から言ふと、彼は率直で、単純で、そして何処かに圧ゆべからざる勇猛心を持つて居た。勇猛心といふよりか、敢為の気象と言つた方が可からう。即ち一転すれば冒険心となり、再転すれば山気となるのである。現に彼の父は山気のために失敗し、彼の兄は冒険の為に死んだ。けれども正作は西国立志編のお蔭で、此氣象に訓練を加へ、堅実なる有為の精神としたのである。

「冒険」を体験し、人生を失敗に終わると見られる森本は、独歩の『非凡なる凡人』における正作の父と兄を想起させる。また、「冒険」の生活を送る父と兄に反対し、立身出世を目指す「勇猛心」を持つ正作の姿が描写される。このように、漱石は独歩の『非凡なる凡人』を意識し、「冒険」を体験し、失敗に終わる登場人物の造形を受容したと考えられる。

(2) スティーブンソン『新亜刺比亜物語』との関連性
敬太郎の「冒険」に対する憧れについて、彼が高等学校にいた頃のエピソードが、次のように記述される。

・敬太郎の此傾向は、彼がまだ高等学校に居た時分、英語の教師が教科書としてスチーヴンソンの新亜刺比亜物語といふ書物を読ました頃から段々頭を持ち上げ出したやうに思はれる。(『風呂の後』・五)

これは Robert Louis Stevenson (一八五〇—一八九四) の『The New Arabian Nights』(一八八二)を指す。十九世紀のロンドンを舞台にし、いくつかの伝奇小説的な短編集から構成される作品で、主人公はボヘミアのフロリゼル王子である。『彼岸過迄』の前半と『新アラビア夜話』¹⁸⁾との関連性について、吉田精一氏¹⁹⁾は「しかし前半の敬太郎中心は、内容にはさしたる深味がなくとも、読者の興味を釣って行く書きぶりは、それとして面白いのである。この探偵趣味や、浪漫趣味は、正宗白鳥もすでに指摘したように、彼の愛読したスチーブンソンの「新アラビヤナイト」から示唆を受けたものである」と指摘する。「探偵」、「浪漫趣味」などという要素については、漱石が『新アラビア物語』から影響を受けたということは先行論にあるように疑う余地がない。さらに、作品の構成や内容のみならず、主要人物の造形の側面についても、共通点があると考えられる。とりわけ、敬太郎とフロリゼル王子に注目したい。ここで、『新アラビア夜話』の作品

の冒頭と結末において描かれるフロリゼル王子の人物像を検討してみたい。フロリゼル王子は次のように紹介される。

・ During his residence in London, the accomplished Prince Florizel of Bohemia gained the affection of all classes by the seduction of his manner and by a well-considered generosity. He was a remarkable man even by what was known of him; and that was but a small part of what he actually did. Although of a placid temper in ordinary circumstances, and accustomed to take the world with as much philosophy as any ploughman, the Prince of Bohemia was not without a taste for ways of life more adventurous and eccentric than that to which he was destined by his birth.⁽⁶⁾ (『Story of the Young Man with the Cream Tarts』)

フロリゼル王子は敬太郎と同様に「冒険」に対する憧憬を持ち、自分の強い「好奇心」に動かされ⁽⁷⁾、不思議な出来事と遭遇する。だが、王子の股肱の臣であるジェラルディン大佐の助力によって、最後に事件の始末を付けることができる。さらに、森本が敬太郎に忠告する場面と同じように、『新アラビア夜話』においても、ジェラルディン大佐がフロリゼル王子に身分と王子がやるべき義務について注意する場面がある。

・ "Your Highness," said the Colonel, turning pale; "let me ask you to consider the importance of your life, not only to your

friends, but to the public interest. (略) but supposing that to-night some irreparable disaster were to overtake your Highness's person, what, let me ask you, what would be my despair, and what the concern and disaster of a great nation?" (『Story of the Young Man with the Cream Tarts』)

王子は大佐の忠告に耳を傾けず、冒険に身を投じるが、結局は重大な事件を解決することになる。この展開をみれば、物語はめでたい結末を迎えるようであるが、作品は意外にも次のように締め括られる。

・ But if the reader insists on more specific information, I am happy to say that a recent revolution hurled him from the throne of Bohemia, in consequence of his continued absence and edifying neglect of public business; and that his Highness now keeps a cigar store in Rupert Street, much frequented by other foreign refugees. (『The Adventure of Prince Florizel and a Detective』)

フロリゼル王子は「冒険」の英雄であるが、自分のやるべき「公務」を放棄したため、賛美されず、王位から退けられることになる。以上をふまえると、本作品における「冒険」及び異常な経験を体験したいという敬太郎の人物設定は、『新アラビア夜話』のフロリゼル王子からも影響を受けたものであると言える。そして、敬太郎は「冒険」を体験した後、「位地に有つく事」はできるが、その冒険は「滑稽」な体験であ

るとされる。結末に主人公が自分の「冒険」がいかに無意味であつたかということを自覚させられる点において、本作品と『新アラビヤ夜話』と『非凡なる凡人』の三作品は共通していると言えるだろう。

三、敬太郎の冒険

(1)「探偵」の仕事の裏側

「神経にはつと響かせ得るやうな事件」に出会いたい敬太郎は「冒険」に憧れる。須永は敬太郎の願望を聞いて、田口に話したことがある。そのような敬太郎ではあつたが、「口の方が大事」だと考え、須永を通して、田口に仕事を周旋してもらふことになる。敬太郎は田口から連絡をもらい訪問するが、二度目の面会も再び断られ、帰らざるを得なくなる。敬太郎は不満を抱き、須永に文句を言いに行くが、須永は不在で、代わりに彼の母に会う。そして、須永の母との会談の最中、田口の「剽軽」な一面が明かされる。

・彼はAを一つ担いで遣らうと巧らんだ。是は町を歩いてゐる時、一軒の写真屋の店先で不図思ひ付いた悪戯で、彼は其店から地方の芸者の写真を一枚買ったのである。その裏へA様と書いて、手紙を添へた贈物のやうに拵えた。其手紙は女を一人雇つて、充分の時間を与へた上、出来る丈Aの心を動かす様に艶めかしく曲らしたもので、誰が貰つても嬉しい顔をするに足る許か、今日の新

聞を見たら、明日此所へ御着の筈だと出てゐたので、久し振りに此手紙を上げるんだから、何うか読み次第、何処其所迄来て頂きたいと書いた中々安くないものであつた。彼は其晩自分で此手紙をポストへ入れて、翌日配達の時又それを自分で受取つたなり、Aの来るのを待ち受けた。(停留所・十三)

田口が「門司とか馬関とか迄」行つた時、Aを欺くことを企む話である。手紙によつていたずらをするモチーフは、志賀直哉の『いたづら』(註を彷彿とさせる。ひとまず、『いたづら』の粗筋に簡単に触れておく。主人公の田島は田舎で教師になる。そして、山岡という同僚に様々な嫌がらせをされる。田島は山岡に対する恨みもあり、山岡を「調伏」するため、佐多三郎と組む。二人は架空の「良家の綺麗な娘」を作り出し、この娘から山岡に「ラヴ・レター」を渡すといういたずらを行う。田島と佐多三郎が山岡に対する「ラヴ・レター」のいたずらを企む場面は以下のである。

・「どうするんだ」／「山岡さんにラヴ・レターをやるんです」／「誰れからやるんだ」／「良家の綺麗な娘からやるんですよ」(中略)「何所かへおびき出して、すつぽかしてやるんですよ。」佐多は吐き出すやうにこれを云つた。(二)

昭和二十九年という『いたづら』の発表年を考え合わせれば、志賀直哉は『彼岸過迄』を読み、この手紙によつていた

ずらをするモチーフを自分の作品に利用していると考えられるだろう。両作品の共通点は、手紙でいたずらをするところである。また、その手紙は、どちらの作品でも相手を騙して誘い出そうとするものである。『いたづら』の場合、結局山岡がこのいたずらの真実を知らないままに物語は終わるが、本作品では、Aに対する手紙の真実が明かされる。田口に会ったことがない敬太郎にとって、このいたずらの手紙の事件は、田口という人物を知る手がかりになったと考えられる。そして、田口と初めて対面した四日後、敬太郎は田口から探偵の仕事依頼した手紙を受け取る。その手紙は「空想よりも猶浪漫的」なものであり、依頼の内容は四時と五時の間に、小川町の停留所で「眉と眉の間に大きな黒子がある」四十恰好の男の行動を探偵し報告することである。「始めて自分が危険なる探偵小説」の「主人公の様な心持がし出した」とあるように、敬太郎は手紙を読み、浪漫的な冒険を体験したいという自分の欲望が満たされるのを感じる。この「探偵」風の仕事によって、一見敬太郎は体験したいと思っていた「冒険」の体験に導かれていくように見えるが、実際には田口が企んだことである。つまり、かつて敬太郎が「探偵の遣るやうな仕事に興味を有つて御出だつて」と須永から聞いたことがあるため、田口は探偵らしい仕事を創り出し、敬太郎に手紙を送ったのである。この田口の手紙について、田口律男氏⁽²³⁾は、「田口の『用事』は『電話』でも簡単に伝えられたはず

なのに、あえて応答を遮断する『速達便』を用いたところに、敬太郎を自由に操作しようとする田口の老獪さを読みとることもできる」と指摘する。田口は自分の企みを成功させるため、千代子と会わせないように、「わざと」呼び寄せるのも気の毒だし、電話では手間が要つて却つて面倒になるし」という口実で、「速達便」にする。敬太郎への手紙は表面的には、田口のAに対するいたずらの手紙を連想させるが、この二つの手紙が異なる目的で使われる点に注意したい。Aに対するいたずらの手紙からは、田口の「剽軽」な側面が浮上する。一方、敬太郎への手紙では、長年「世の中と闘かつてゐる」老練な田口が、敬太郎の人柄を試そうと、小川町での冒険の策略を企んだのではないか。また、自分の人柄を試す手紙の内容を実際の冒険と信じ込んでしまう敬太郎の姿に、彼の軽率な性格が浮かび上がると言えるだろう。

(2) 現実世界への帰着

田口から探偵の仕事依頼する手紙をもらった時、敬太郎は、自分が「探偵小説」の主人公になったかのように感じる。だが、「四時と五時の間」という混雑した時間帯に、容易に「四十恰好」の男を見付け出せるかどうか敬太郎は「不安」になる。その時、「占なひの婆さん」の予言を思い出し、森本がくれた洋杖を持って行くことにする。「万事が綺麗に解決されたもの」と考へた敬太郎は、躍り上る様」と敬太郎の喜

んでいる様子が見られ、この時点では彼が「探偵」の仕事遂行する意志を持っていると考えられる。しかし、「小川町」停留所が二箇所あることを発見した敬太郎は自分の不注意に気が付き、「自己の迂闊を深く」後悔する。どうしようもない「迷信のはびこる家庭に成長した」敬太郎は単に「運を天に」任せるしかなくなる。

「停留所・二十六」において、洋杖の「蛇の頭が偶然東向」に向かい、これを見た敬太郎は洋杖が「方角を教へる指標」の役割を果たすものであると解釈してしまう。だが、「五時はもう疾うに過ぎ」ており、敬太郎にとつて洋杖は仕事を成功させるものではなくなっている。「他を騙す為にわざわざ拵らえた婆さんの予言も、大事さうに持つて出た竹の洋杖も、其洋杖が与へて呉れた方角の暗示も、悉く忌々しさの種になつた」や、「洋杖は自分の馬鹿を嘲ける記念だから、帰り掛に人の見てゐない所で二つに折つて、蛇の頭も鉄の輪の突がねも滅茶々に、万世橋から御茶の水へ放り込んで遣らうと決心した」とあるように、この「方角を教へる指標」の洋杖は「探偵」の仕事の失敗を自覚させるだけのものになつてしまつてゐるだろう。その時、「崩髪に結つた一人の若い女」を観察し、敬太郎は自分が待ち受けていた男性と偶然会ふ。その男性は次のように描写される。

・此黒子を別にして、男の容貌に是と云つた特異な点はない。眼も鼻も口も全く人並であつた。けれども離れ

離れに見ると凡庸な道具が揃つて、面長な顔の表に夫々の位地を占めた時、彼は尋常以上に品格のある紳士としか誰の目にも映らなかつた。（略）此男の風采態度と探偵とは到底も釣り合はない性質のものだといふ気がした。敬太郎から見ると、此人は探偵して然るべき何物をも彼の人相の上に有つてゐなかつたのである。彼の顔の表に並んでゐる眼鼻口の何れを取つても、其奥に秘密を隠さうとするには、余りに出来が尋常過ぎたのである。彼は自分の席へ着いた時、田口から引き受けた此宵の仕事に対する自分の興味が、すでに三分の一ばかり蒸発した様な失望を感じた。（「停留所」・三十二）

「特異な点はなかつた」や「凡庸」などという表現から分かるように、「自分の好奇心を幾分か満足させ得る」女性にひきかえ、「四十恰好」の男性は何の特徴もなく、敬太郎の興味をそそる対象ではなかつた。結局、「田口の役に立ちさうな」事態をあまり把握できず、敬太郎は「心細くな」る始末である。その後、敬太郎は松本の口から、自分が引き受けた「探偵」の仕事の真実を知らされ、小川町での事件は、単に叔父と姪との待ち合わせに過ぎなかつたということまで分かる。「世間の出来事のうちに最も平凡を極めたものの一つの様に見た。それを込み入つた文でも隠してゐるやうに、一生懸命に自分の燃やした陽炎を散らつかせながら、後を追掛けて歩いたのが、さもなく馬鹿くしくなつて来た」（「報告」）

・十三」とあるように、「騙された自分の方が遥かに愚物」という思いから、自分の「小川町」での体験を反省すると同時に、自分が望むような探偵の仕事は実際に存在しないことに気付かされる。このようにして、「浪漫趣味の青年」である敬太郎は、自分が望むような「冒険」小説の主人公にもなれず、脱出したいと願う「平凡」な生活の中にまた帰着することになる。

四 須永の「疑惑」という苦惱

「遺伝的に平凡を忌む」敬太郎は、常に「尋常と変つた新しい調子」の「神経にはつと響かせ得るやうな事件」に出会うことを望む。「平凡」な生活の中で、敬太郎は自分の想像と好奇心を働かせ、「冒険」を追求していく。一方、須永を中心として語られる「須永の話」と「松本の話」を通観すれば、「尋常と変つた」ような出来事はあまり描写されず、逆に須永の家族における人間関係、とりわけ、母や千代子との問題と彼の苦悩が精密に描かれることがわかる。須永の苦悩の原因は、「疑惑」から生じている。須永は「よく人を疑ぐる代りに、疑ぐる自分も同時に疑がはずには居られない性質」であるため、自分自身に対しても、また周囲の人々に対しても疑惑を持つている。「須永の話」の最初で、須永は子供時代の両親と自分の関係を語る。須永の父は早くに亡くなった。葬式の際、須永が一人縁側に出た時、母は「小さい声

で」次のように言う。

・「御父さんが御亡くなりになつても、御母さんが今迄通り可愛がつて上るから安心なさいよ」と云つた。(略)
何の意味も付ける必要のない彼等の言葉に、僕は何故厚い疑惑の裏打をしなければならないのか、それは僕自身に聞いて見ても丸で説明が付かない。(「須永の話」・三)
母のこの慰めの言葉によつて、須永と母との間に溝が生じてしまう。この「疑惑の裏打」という言葉をめぐつて、田口氏は「父母の些細な言動が、その子に出生の「疑惑」を刻印してしまうといった設定は、国木田独歩の『運命論者』にも見いだせる。(略)ただし、『運命論者』の場合は、出生の秘密が二重仕掛けになつており、いったん父によつて秘密が明かされた後に、さらに「原因結果の理法」を超えた皮肉な「運命」が主人公を見舞うように設定されている」と指摘する。また、独歩の『運命論者』²⁶について、漱石自身は「独歩氏の作に低徊趣味あり」²⁶において、次のように述べている。

・『運命論者』は面白いと思つて讀んだ。實際面白いと云ふ感があつた。然し、其面白いと云ふ感じは愉快と云ふ感ではない。只、氣であつたのだ。あの作物が自然派の作物であるかどうか余は知らぬが、『運命論者』を讀んで得た感じは、恰度スチヴンソンを讀んで得た感じに近い。(略) スチヴンソンの書いた作物は突飛である。然

し、『運命論者』の作者は、此作物を、只、気で書いたものではない。千人中只一人あるか無いかと云ふやうな、最も珍しい事件を借り、其事件に依つて、人生の或る物を言ひ現はさうとしたので、スチヴンソンの作物とは、其趣きが大変違つて来る。

引用箇所から分かるように、漱石は独歩の『運命論者』を褒めている。田口氏が指摘するように、主人公の出生の秘密に対する『疑惑』のモチーフは、漱石が読んだ『運命論者』の影響を受けたものであると思われる。また、独歩の『運命論者』を読んで得た感じは、スチヴンソンの作品を読んで得た感じと近いという漱石の言葉に注意したい。引用箇所で言及された「スチヴンソン」は『新アラビア夜話』の作者である。このことから、本作品を創作するにあたって、作者は独歩とスチヴンソンの作品から影響を受けていると推測できよう。そして、須永は母の言葉に対して、疑惑を持つものの、そのことを母に確認できずに、自分の心境を次のように語る。

・時々母に向つて直に問ひ糺して見たい気が起るが、母の顔を見ると急に勇氣が挫けて仕舞ふ。さうして心の中の何処かで、それを打ち明けたが最後、親しい母子が離れ々々になつて、永久今の睦まじさに戻る機会はないと僕に耳語くものが出て来る。夫でなくとも、母は僕の真面目な顔を見守つて、そんな事が有つたつけかねと笑ひに紛らしさうなので、さう剥ぐらかされた時の残酷な結

果を予想すると、到底も口へ出された義理ぢやないと思ひ直しては黙つてゐた。(須永の話・三)

ここで須永の葛藤が明らかにされる。須永は母に真実を聞くうとするものの、波線部に見られるように、自分と母の関係が破綻することを恐れ、母に聞くことをやめざるを得なくなる。須永は自分が動けない理由を「自慢の反対で、全く信念の欠乏から来た引込み思案なのだから不愉快である」という。このような性格のため、須永は世間との交渉ができず、無力な状態に陥り、母に「気の毒」を感じるのみである。さらに、むやみに自分の「理屈」と「思想」にとらわれ過ぎるため、自分の思想に苛まれ、現実の世界で何もできない無力な青年の姿が浮き彫りになる。また、須永の神経を悩ますもう一つの問題は、田口の娘で、須永の従妹である千代子との関係である。母に対するのと同様に、須永は千代子に対しても疑惑を抱く。鎌倉に行く前、須永は千代子を「最も純粹な一人」と固く信じていたものの、鎌倉で暮らした二日の間に、彼女の「技巧」を疑い出すのである。これは、千代子の妹の友達の見に当たる高木が出現してからのことである。高木の出現によつて、須永は劣等感を感じる。この疑いが生じる前に、須永は千代子と結婚できない理由として、彼の千代子に対する恐れを挙げる。須永は、「妻の眼から出る強烈な光に」耐えられないと言ひ、この「強烈な光」について次のように述べている。

・彼女は美くしい天賦の感情を、有るに任せて惜気もなく夫の上に注ぎ込む代りに、それを受け入れる夫が、彼女から精神上の營養を得て、大いに世の中に活躍するのを唯一の報酬として夫から予期するに違いない。年のいかない、学問の乏しい、見識の狭い点から見ると気の毒と評して然るべき彼女は、頭と腕を挙げて実世間に打ち込んで、肉眼で指す事の出来る権力が財力を攫まなくつては男子でないと考へてゐる。單純な彼女は、たとひ僕所の嫁に來ても、矢張りさう云ふ働き振を僕から要求し、又要求さへすれば僕に出来るものとのみ思ひ詰めてゐる。(須永の話・十二)

千代子と結婚すれば、彼女に「現実世界」に関わることを要求される。このことを須永は恐れているのである。つまり、須永にとつて千代子との結婚は、独立し、現実の世界で活躍しなければならなくなることである。「引込思案」な性格の須永は到底このような状態を受け入れることができない。そのため、松本の「自然の手で直接に發展させて貰ふのが一番上策だ」という言葉にあらわれるように、須永と千代子の問題は、解決されないままとなつてしまふ。

五. 二人の青年の對置と「とくろ」のイメージ

前節において、須永という人物を考察し、彼の中にある「疑惑」と「恐怖」について考へてみた。そこには、敬太郎とは

違い、内面で苦しむ須永の青年像が浮かび上る。さらに、敬太郎と須永という人物を比べれば、いくつか相違点を指摘できる。「国に少し田地」を持つてゐる「田舎者」の敬太郎は、「好奇心」が常に働き、自分の想像を加えて物事を見る。ここで、敬太郎の觀察に注目したい。探偵をしない理由について、敬太郎はその職業が「罪惡の暴露にあるのだから、予じめ人を陥れやうとする成心の上に打ち立てられた」ものであるからだと述べる。「自分はたゞ人間の研究者否人間の異常なる機關が暗い闇夜に運轉する有様を、驚嘆の念を以て眺めてゐたい」とあるように、物を見るだけで、實際に関与しようとしなないことが明らかである。また、松本と千代子をつけ回した後、田口に報告するべき役に立つ情報がないと考え、敬太郎は「たつた一言で好いから、思ひ切つた自分の腹をずばりと云つて見たいと考へてゐたが、此所で云はなければ最う云ふ機会はあるまいといふ氣が此時不図萌した」と決心する。ここから、敬太郎は自分の考え通りに行動を取る人物であることがわかる。一方、「江戸っ子」の須永は父親から譲られた財産で暮らし、「就職といふ問題について唯の一日も頭を使つた事がない」とあるように、仕事をする意志がないと見られる。さらに、須永は敬太郎が理解しにくい「理窟」を弁える人である。「神經の鋭い」須永は物を觀察し、「評価したり、解釈したり」ということをよくする。だが、「物を誇大に考へ過したり、要らぬ僻みを起して見たりする弊が」

あるため、須永は「内面の苦悩」から逃れられなくなる。また、「万事に考え込む丈で、一向華やかな行動を仕切る勇氣がない」や、「僕は思つた事をすぐ口へ出した、又は其儘所作にあらはしたりする勇氣のない、極めて因循な男なんだから」と言うように、物事を考えるだけで行動を取らない須永の性格は何度も描写される。以上見てきたように、出身地や性格、行動などの側面において、敬太郎と須永は対照的に設定されていると言えるだろう。

また、敬太郎と須永の人物の描写について、「とごろ」というイメージが使われる。「それすら精を出さずにとごろ許巻きたがつてゐるのを、向で引き摺り出して呉れたのだから、中途で動けなくなつた間意さのない代りには、漸と思ひで井戸を掘り抜いた時の晴々した心持も知らなかつた」とあるように、敬太郎は外からの刺激がないと、自分から動かない人物であるため、卒業した時から、「刺戟」を求めようとしていく。さらに、敬太郎は「硝子張の箱の中に入れられて、外の物と直に続いてゐない」心持がし、「平凡」な現状に閉じ込められている状態を意識していると考えられる。そして、彼は「平凡さ」を感じることによつて、自分が何もできないと考え、「無能力と密切な關係」を意識し、このような状態から「突き抜け」ようとし、「痛快」さを感じたいと考えている。このことから、敬太郎は外部に向かい、動いていくようになる。一方、須永の人格に対する松本の評する言葉では、

「とごろというイメージ」は次のように記述される。

・市蔵といふ男は世の中と接觸する度に、内へとごろを捲き込む性質である。だから一つ刺戟を受けると、其刺戟が夫から夫へと廻転して、段々深く細かく心の奥に喰ひ込んで行く。さうして何処迄喰ひ込んで行つても際限を知らない同じ作用が連続して、彼を苦しめる。（略）この不幸を転じて幸とするには、内へ内へと向く彼の命の方向を逆にし、外へとごろを捲き出させるより外に出ががない。（松本の話・一）

以上の引用から、同じ「とごろ」の状態であるものの、世間という外からの「刺戟」に対する敬太郎と須永の反応の相違は明らかである。須永は外からの「刺戟」に耐えることができず、それを受けると自分の中に引込み、自分から世間との交渉を絶ち切ることになってしまう。結果として、敬太郎は「停留所」での事件を経験した後、田口から仕事を周旋してもらうため、「冒険」という「非現実的な世界」ではなく、実際の世界に向かうようになっていく。一方、現実世界との接觸を避ける須永は、「松本の話」に見られるように、徐々に「浮気」になるよう努力していく。

六、まとめ

本作品における敬太郎の役割は、森本の話聞き、松本の話を通して須永と千代子の間柄を聞くところにあるように見

える。また、作中の分量を見れば、敬太郎を中心に描写される部分は、須永を中心に語られる部分より少ない。だが、敬太郎の人物造形や、敬太郎と須永の対照的な性格を考察してみれば、彼は須永と同じように主要な人物と言えるよう。

作品の前半では、敬太郎の興味が描かれる。彼を様々な出来事に導くのは、好奇心と想像力である。また、敬太郎が演じる「滑稽の意味以外に通用しない」小川町での経験も語られる。その後、松本によつて自分の望むような「冒険」は単に叔父と姪の待ち合わせであることが知らされる。小川町での体験の後、敬太郎は地位に就くが、「冒険」に対する好奇心は徐々に薄れ、平凡な生活に戻っていく。以上のような敬太郎の人物造形、及び「雨の降る日」以降の話の雰囲気は転換から、本作には二人の主人公が設定されていると言えるだろう。

また、「須永の話」に入ると、須永に焦点が当てられ、彼が「理屈」で苦悩する話が語られるようになる。周囲の「平凡」な生活の中から自分の好奇心を満たす出来事を想像していく敬太郎と異なり、須永の方は自分、高木、千代子という関係を想像し、苦しむ。ここから、いずれの主人公も、自分の思想にとらわれるあまり、現実の世界との間の融通がきかなくなってしまうと言える。「頭の中の世界と、頭の外にある社会との矛盾」に、一寸首を捻つたのは事実には相違なかった」とあるように、敬太郎は自分の想像と実際の世界の

違いを意識する。一方、「松本の話」においては、須永は松本の忠告通り、「浮気」になって外に向かつていこうとする。ここで注意したいのは、想像にとらわれる主人公と対照的に描かれている松本の妻の存在である。「妻は愛想もなく、当り前ですわ、三面記事や小説見たやうな事が、滅多にあつて堪るもんですかと答へた。僕の妻は小説と三面記事とを同じ物の如く見做す女であつた。さうして両方とも嘘と信じて疑はない程浪漫斯に縁の遠い女であつた」(「松本の話」・十)とあるように、新聞に連載された冒険談を読んで、想像を働かせる敬太郎、及び自分の「理屈」にとらわれ、物事を「誇大」に考える須永とは対照的に、現実をそのまま見ている女性を設定されるのである。

本作品には「平凡極まる東京」という現実の世界において、「平凡」な生活の中で閉ざされながらも、彷徨いながら、切り抜けようとする青年の姿が浮かび上がっていると言えるだろう。

注

(1)「大阪朝日新聞」には明治四十五年一月二日から四月二十九日まで連載された。

(2) 牧野陽子「いざないの空間——『こゝろ』と『彼岸過迄』」(『漱石の『こゝろ』どう読むか、どう読まれてきたか』、一九九二・十二)

- (3) 桶谷秀昭「日常と新淵——『門』・修善寺の大患・『彼岸過迄』」
 『夏目漱石論』、河出書房新社、一九八三・六。松元寛「『彼岸過迄』から『行人』へ」(『漱石作品論集成【第八巻】・彼岸過迄』、桜楓社、一九九一・八)等。
- (4) 玉井敬之・坪内稔典・浅田隆「鼎談」(『漱石作品論集成【第八巻】・彼岸過迄』、桜楓社、一九九一・八)
- (5) 吉田精一「解説」(『漱石全集・第九巻 彼岸過迄』、角川書店、一九六一・四)
- (6) 瀬沼茂樹「『彼岸過迄』」(『漱石作品論集成【第八巻】・彼岸過迄』、桜楓社、一九九一・八)
- (7) 藤井省三「『彼岸過迄』——「自我」の探求とアンドレーエフ文学」(『漱石作品論集成【第八巻】・彼岸過迄』、桜楓社、一九九一・八)
- (8) 注5に同じ。
- (9) 大岡昇平「『彼岸過迄』をめぐる」(『漱石作品論集成【第八巻】・彼岸過迄』、桜楓社、一九九一・八)等
- (10) 注2に同じ。
- (11) 安藤恭子「『東京朝日新聞』から見た『彼岸過迄』」『南洋探検』と「煤煙」と」(『漱石研究』No.11、翰林書房、一九九八・十一)
- (12) 山田有策「『彼岸過迄』 敬太郎をめぐる」(『漱石作品論集成【第八巻】・彼岸過迄』、一九九一・八)
- (13) 玉井敬之「『彼岸過迄』論——空想から現実へ——」(『漱石作

- 品論集成【第八巻】・彼岸過迄」、一九九一・八)
- (14) 山田氏(山田輝彦「『彼岸過迄』論——敬太郎の冒険——」『漱石作品論集成【第八巻】・彼岸過迄』、一九九一・八)は玉井氏(前掲論文)と同様に、敬太郎と三四郎を比較し、作品の前半における敬太郎に関わる物語を「冒険譚」と捉えている。
- (15) 重松泰雄「(趣向)としての須永市蔵——『彼岸過迄』 管見——」(『漱石作品論集成【第八巻】・彼岸過迄』、桜楓社、一九九一・八)
- (16) 出原隆俊「裏側から読む『心』」(『語文』、二〇〇七・十二)
- (17) 明治三十六年三月、『中学世界』に発表された。後に第三作品集『運命』に収められた。
- (18) 現在、『新亜刺比亜物語』は、『新アラビア夜話』というタイトルが付されているため、論者は『The New Arabian Nights』に言及する際、後者の名前を用いることにする。
- (19) 注5に同じ。
- (20) Robert Louis Stevenson, 『New Arabian Nights』, Chatto & Windus, 1920.
- (21) 『新アラビア夜話』において、各話に登場する主人公は青年で、皆フロリゼル王子と同様に、自分の「好奇心」のため危険な出来事に絡み合っていく。ただし、「二輪馬車の冒険」の主人公であるブラックベリー・リッチ中尉だけは中年男性である。
- (22) 志賀直哉『いたづら』は昭和二十九年四月二十日、『世界』に掲載された。昭和二十九年八月、中央公論社より刊行された

『朝顔』の末尾に収録された。

(23) 田口律男・瀬崎圭二『漱石文学全注釈10・彼岸過迄』、若草書房、二〇〇五・十一

(24) 注23に同じ。

(25) 国木田独歩の『運命論者』は、明治三十六年三月『山比古』に発表された。後に第三作品集『運命』に収められた。田口氏は、『運命論者』から、次のような箇所を引用する。「僕は父の言葉が気になつて堪りませんでした。これも普通の小供なら間もなく忘れて了つたゞらうと思ひますが、僕は忘れる処か、間がな隙間がな、何故父は彼のやうなことを問ふたのか、父が斯

くまで狼狽した処を見ると、余程の大事であらう、と少年心に色々と考へて、そして其大事は僕の身の上に関するのだと信ずるやうになりました。」

(26) 夏目金之助「独歩氏の作に低徊趣味あり」(『新潮』九卷一号、明治四十一年七月十五日)『漱石全集・第二十五卷』、岩波書店、一九九六・五

【付記】『彼岸過迄』本文の引用は、『漱石全集 第七卷』、岩波書店、二〇〇二・十に拠る。

(ウイリヤエナワット・ピヤヌット／本学大学院博士後期課程)